



ファンタジーは現実とどう関わるか (上)

— 異世界と現実世界 —

きどのりこ



現実世界へのフック

この小論では、異世界を描くことの多いファンタジーと呼ばれる分野で、今どのような世界が描かれているか、その世界は現実とどのような関わりを持っているかについて見てみたい。また次回では異世界に限らず、作中で発揮される、特に若い人びとに付与された超能力や魔法の力が現実においてどのようなメタファーとなっているかを考えてみたいと思っている。

ファンタジーの作者は当然、この現実世界に生きている。その現実とは異世界とどのように関わっているのだろうか。

すでに古典的名作となった、一九五〇年に出されたレイ・ブラッドベリのSF『火星年代記』（作品の時代は二〇三〇年一月となっているが、旧版では一九九九年だった）の中では、火星に到達した人びとが遭遇したのは地球の故郷の町と同じ、懐かしい人びとの住む町の風景だった。火星

人のテレパシーによるものと説明されているが、これはとても象徴的だ。作者がいかに卓抜な別世界を描き、天空に浮かぶ島々やアンドロイドの跋扈する超未来都市を創造しても、それは今、作者が生存しているこの世界の構造、歴史、問題に深く関わらざるを得ないのだ。

パラレル・ワールドを描いた作品が多いダイアナ・ウィン・ジョーンズは、第二次世界大戦の最中だった自分の子ども時代を振り返って、「当時のわたしが知っていたことのうち、いちばん外側の層にあったのは、戦争による世界の暴力と狂気、そしてのちの冷戦でした（中略）。世界とは基本的にとことん不安定なものだという感覚を、わたしはふり払うことができません。だからこそ、わたしはよく多重平行世界について書くのだと思います。— どのようなことも起こり得るし、どこかでは実際に起きているはずなのです」（『ファンタジーを書く』より）と述べている。

子ども時代の体験のみでなく、この世界でのさまざまな